

友の会通信

新顔生物の登場 —特別展に寄せて—

館長 青木 淳一

今までその土地では見られなかった生物が見つかる、だれでもがハッとすると、それが希少な生物であって、綿密な調査によってやっと発見されたという場合は、発見者の喜びはとて大きい。しかし、それが自然分布ではなく、人間の手で運ばれたものであることが分かると、とたんに幻滅を感じる。まして有害生物の場合は、困ったものだということになる。人間に害を与えない生物であっても、困った問題が起きるのであり、その点に世間一般は気づかないことも多い。

7月19日から始まった特別展「侵略とかく乱のはてに一移入生物問題を考える」は生物系の学芸員がそれぞれの専門の生物群について、移入生物が引き起こすさまざまな問題を浮き彫りにしている。非常に熱意をこめた展示になっているが、これは各学芸員が自分が扱っている生物群において移入種による困った問題を抱えており、それに対する一種の怒りのようなものを、ぶつけながら展示の作製に当たったからだろうと思う。本館が横浜にあった時代からせつせと集められた移入生物に関する資料を基に、内容の濃い展示になっている。

しかし、実際にみとみると、真面目な中に「遊び心」があちこちに見られ、それが見るものの気持ちをほぐし、楽しませ、退屈せずに勉強させられてしまう。まず、入り口を入ってすぐの、巨大なブラックバスと、それが一年間に食べてしまうメダカの数を実物大のOHPフィルム写真で、見せているのが圧巻であり、わかりやすい。話でも、

文章でも、展示でも、何事も「初っぱな」が大事である。それにつられて見ていくと、実物標本、分布図、グラフ、それに漫画まであるし、ダジャレまで飛びだし、なかなか楽しい。順路の最後にはトンネルがあって、憧れの自然をイメージした職員による作品が並ぶ。恥ずかしながら、私の駄作のクレパス画も飾っていただいている。

この特別展のために作られた図録はドキッとさせるデザイン。黒、赤、白で描かれた、おどろおどろしい恐怖の表紙をめくると、ショッキングピンク。これも遊び心であろう。

移入生物問題で一番厄介で困るのは、世間一般の人達の生き物に対する「やさしい心」である。放してあげたい、自然に帰してあげたいという思いやりが、時として重大な結果を招くことを、この特別展を通して是非とも知っていただきたいと思う。

最後に、展示の準備に当たって、友の会やボランティアのみなさんの大きなお力添えがあったことに、深く感謝したい。

未来へつなげる自然とは・・・

特別展図録から

私たちに課せられた責務とは、今ある自然にはできるだけ手を付けず、未来へつないでいくことなのです。外来種が自然の中に入ったとき、何が起こるかかわからない、そして起こってしまったからでは元に戻せない、だから外来種は抑制すべきなのです。
(A5版 142頁900円)

☆☆ 友の会 NOW! ☆☆

こんにちは、副会長の佐藤です。今回より私が案内役となり、友の会の運営について皆様にお伝えしていくことになりましたので、どうぞよろしくお願ひします。

平成15年度がスタートしてから、3回の役員会を行いました。そこで友の会設立7年目で会員数が500人を超えている状況を改めて認識すると共に、より一層会員のためになるような運営のあり方を話し合っています。第3回役員会では濱田隆士会長にご参加いただき、昨今の博物館を取り巻く社会事情を伺って研修をしました。友の会通信については、会員と運営をつなぐ役割を再確認し、次号より紙面をリニューアルしてお届けします。会員の皆さんに「友の会に入って良かった」と思っただけけるよう、活動の充実を図りながら、組織の基盤を整え、博物館と良好なパートナーシップを築いて行きたいと思っています。

どうぞ応援してください！

<友の会事務局会議報告>

第39回 7月5日 友の会役員12名

- ・各行事グループの実施報告と今後の予定
- ・サロン・ド・小田原について
- ・来年「ミュージズ・フェスタ2004」の取組み
- ・友の会通信トップページのテーマについて
- ・作業スタッフ募集について

※催し物のチラシは、紙代や送料の節約のために両面印刷にしました。ご了承下さい。

※先日、会員の陶山幸子さんがこの『通信』を、創刊号からミュージアムライブラリーで見られるよう整理してくれました。ご利用下さい。



濱田会長と話し合い



彫刻の森美術館を視察する（女性）役員

広報委員からのお知らせ

これまで、表紙のページは移入生物をテーマに生物系の学芸員によって執筆されてきましたが、今回でひとまず終了します。

次回からは新しいテーマでお送りする予定です。お楽しみに!!

八木 逸さんの個展のご案内

通信の可愛いカットを描いている八木さんの個展が開かれます。行ってみませんか。

日時：10/13（月）～10/18（土）

場所：みゆき画廊

東京都中央区銀座6-4-4 第二東芝ビル2F
（最寄り駅は有楽町）

みゆき画廊 || 阪急 || 数奇屋橋交差点

SONY || 外堀通り

ライブラリーからのお願い

最近、ミュージアムライブラリーの本を持ち出す方がいて困っています。ライブラリーの図書や雑誌は、館外はもちろん、館内でも貸し出しは行っていません。

もし実習実験室や講義室などで、友の会活動等で調べるために、ライブラリー内の図鑑や雑誌が必要になった場合でも面倒ですが、ライブラリー内をご利用ください。



★★友の会通信が届くまで★★

友の会通信は、皆さんのお手元に届くまで、実にたくさんの人たちの手によって支えられています。今回はそれを紹介します。そして次号からはもう一步進めて、編集会議に力を入れることになりました。編集・校正・発送等なんでも、できる範囲で協力して下さる方、事務局までご連絡ください。(広報委員 横溝吉香)

1ヶ月前—編集会議・原稿を集める—

役員会議で行事報告や行事予定等の情報を収集する。奥野学芸員に館側からの記事や事務局に寄せられた「会員からのおたより」の有無を確認して、レイアウトを考える。

3週間前—編集作業に入る—

メールできた原稿はそのまま編集できるが、郵便やFAXで届いた原稿は入力する。手書き文章がたくさんある時は、木村恵美さんに依頼する。集まった原稿はパソコンのページメーカーという編集ソフトを用いて大まかに編集する。編集した原稿を八木逸さんにFAXで送り、カットを依頼する。この段階で、原稿がそろわない時は「好きな絵を描いて！季節の絵を描いて！」などと強引にお願いする。あわせて、奥野学芸員やそれぞれの執筆者、担当者にもFAXで原稿を送り、間違いがないかどうかの確認作業を行う。

2週間前—校正してまとめる—

それぞれから戻ってきた校正原稿を修正し、カットを取り込み、通信の体裁を整える。あとから届いた原稿も何とかして入れる。原稿が足りないと頼んだり、自分で書いたりする。少しでも読みやすい物をめざして作るが、要望や意見が電話・FAX・メールで次々と届くので、この時期の私は相当に混乱する。時にはパソコンの作業が深夜・早朝に及び、私自身の仕事も月末は忙しく、家族からひんしゅくをかったりする(私は好きでやっているが)。博物館は(月)休みだし、(土)(日)は職員が半数勤務になるので、博物館には、何とか(金)までに版下原稿を作り、最終校正を頼む。

発送の3日前(水)—印刷屋へ宅急便で送る—

プリントの写真はそのまま、メールで送られてきたデジカメの写真は紙に印刷したものと、CDに保存したものを、出来上がった版下原稿と一緒に宅急便で送る(ここでいつも「やったあ。間に合ったあー。」と叫ぶ)。原さん宅にもホームページ用に最終原稿をメールで送る。印刷屋さんは(木)に印刷して乾かし、(金)に二つ折りにして、夕方届けてくれる。

発送日当日(偶数月、主に第一土曜日)

10時、発送作業開始。事前に博物館側で打ち出してくれた宛名シールを封筒に貼り、通信や『自然科学のとびら』(ある場合)、その他チラシ類を揃えて入れる。この作業は役員をはじめ協力して下さる方がいつも8人前後おり、おしゃべりしながらできるので楽しい。会員の廣井隆史さん(根府川郵便局の局長)も参加してくれ、根府川郵便局から皆さんの所へ届く。ふうーっ。終わった。

木村恵美さん(会員)

手書き原稿をひたすら入力して、横溝宅へメールで送る。

八木逸さん(会員)

横溝からきた原稿を読んで、イメージを膨らませカットを描く。FAXで横溝宅に送り、原宏さん宅にも速達で送る。

博物館・各担当

校正する

原宏さん(会員)

八木さんから送られてきたカットをスキャナでパソコンに取り込み、使いやすいうように「エクセル」に貼り付け、横溝宅へメールで送る。数日後、横溝から送られてきた最終原稿をホームページに載せる。



ホームページを見る時は、「生命の星・地球博物館」で検索して、「友の会」を開くと早い。

会員からのおたより

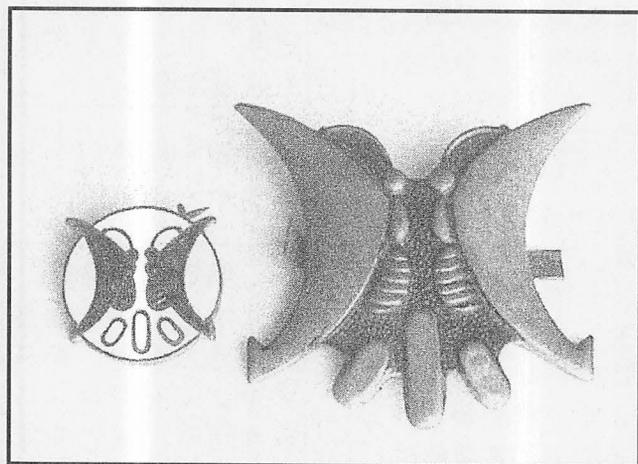
その1 ヒメギフチョウの取り持つ縁



オープンラボの活動紹介と身近なウォッチング」を掲載している、私のホームページで、
母校の古海小学校（長野県信濃町立）の校章を
紹介していますが、偶然それを見つけて、お便り
をくれたお母さんがいらっしゃいましたので
ご紹介します。すごいドラマだと思いませんか？（町田 誠）

ホームページのトップ

<http://member.nifty.ne.jp/yumekikaku/>

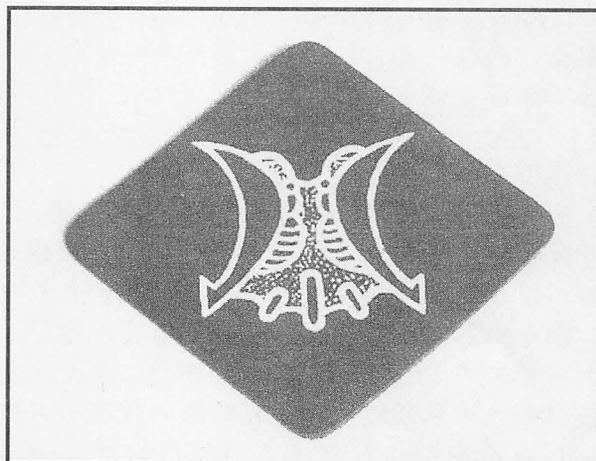


校章1 左が女子用、右が男子の帽子用

はじめてお便りさせていただきます。

実は、友の会のホームページを見ていて「あっ！」と思いました。ヒメギフチョウの向き合った形の校章を私も持っているからです。

今から31年前の話です。私がヒメギフチョウの飼育を行い（実家は秋田県横手市です）、そのことを作文に書いて、「作文コンクール」に応募しました。（まぐれにも）それが全国入選して（副賞はヨーロッパ旅行でした。いい時代だったんですね）新聞等に載ったのをたまたまご覧になった古海小学校の先生が、その校章を送ってくださったのです。



校章2 通学バッグ用

ヒメギフチョウの校章の学校、なんてステキなんでしょう！と思ったのを今もはっきり覚えています。なつかしさのあまり、町田様にメールを書いてしまいました。ヒメギフチョウが運んだ、私にとってはうれしい事件(?)でした。

今年から、博物館の「昆虫採集入門」講座に中1の娘が参加させていただいています。

（平塚市 加賀玲子）

その後、加賀さん親子は、7/13からオープンラボのスタッフに加わり、「夏休みオープンラボ」で活動しています。（町田 誠）

※ヒメギフチョウの関しては通信27号でも紹介しています。

その2

ブナの原生林をたずねて

先日、6月21日(土)から22日(日)に、白神山地のブナの原生林を見てきました。あまりにも素晴らしかったのでお知らせします。

1日目が、十二湖巡りとハイキング、2日目が、ミュージアムと暗門の滝へのハイキングのバスツアーでした。

十二湖巡りでは、ガイドさんの「そのブナの落ち葉が何層にも積もった地面を踏んでみて下さい。」の声。言われたとおりに足を踏み入れると、ぐぐっとしなやかに沈む込み、その感触はクッションさながら。それから、モリアオガエルの卵も見ました。小さな白いアワの粒がソフトボールより少し大きく、池の側のあちらこちらの木にぶらさがっているのです。なぜどうして、カエルがこんな高い木の上まで登るの、とびっくり。

翌日は、白神山地のミュージアムへ。そこでは世界遺産に登録された経過と白神山地の四季折々の姿や動植物の説明などが、すばらしい音楽とともに大きなスクリーンいっぱいに



水が神秘的な藍色の青池。ブナが映る。

映し出されて、もうそれだけで身体中が自然でいっぱいになった気分でした。その後、暗門の滝へと歩くと、吹いて来る風のなんともさわやかなこと。聞けば、万年雪の上から吹いてくる風で、まるで天然クーラーのよう。ブナの林は薄暗いが、少し日の光が差し込むと、その葉はきらきらと輝き出す。この葉の美しさを感じるのは、それだけ私が年をとったのかな。でも、無事に歩けたし、新緑の中、十分森林浴を満喫してきました。(内海信子)

植物ノート2 「ネムノキの不思議」- 私のネムノキ観察 -

朝、まずネムノキ探しから始める。低めの観察し易いつぼみのついた木を探して、川べりを自転車で走ること5分、橋の近くにありました(8:30頃)。一旦戻って、お昼頃行ってみると、つぼみにピンク色の所1~2mm確認(12:30)。それから1時間毎に行ってみると、だんだんピンクが強くなり、オシベがぐんぐんくねりながら上ってきました。ついに18:00頃ピンク色のオシベがピーンと張って俗に言う、咲いた状態になりました。この時、花のすぐ下の葉はもう閉じかけていました。やはり夕方咲くというのは本当でした。それと同時くらいに葉も閉じ始めるというのも本当でした(つぼみがピンク色になってから5時間半くらいで咲いたわけです)。夜10時過ぎにもう一度行ってみると、葉はすっかり閉じていましたが、花は咲いていました(小雨が降っていても)。ネムノキの葉のように昼と夜で葉を開閉することを就眠運動といいます。ネムノキの葉などマメ科やカタバミ科などの就眠運動は、葉や小葉の基部に葉枕(ようちん)と呼ばれる少し膨らんだところ

があって、ここの細胞が昼と夜で膨圧が変化するため、葉を開いたり、閉じたりします。昼間の間は葉を水平にして光を吸収して光合成を行うのでしょうか、夜はなぜ葉を閉じなければならないのでしょうか? 2つの説があるそうです。



①葉から熱が逃げないようにするため。

②花芽の形成を月の光などで阻害されないようにするため。いずれが本当かまだはっきりわかっていないとのこと。

次の日の朝、6時半頃には葉はすっかり開いて花もまだ咲いていましたが、午後行ってみると、川の草刈でネムノキは切られていました(残念)。少し離れた所のネムノキで、葉が閉じ始めたのは夕方17:50でした。

こうしてネムノキの一日を見てみると、葉を閉じてまた閉じるまで約24時間、私たちの一日も24時間、サイクルが似ていませんか?(植物観察会世話係 菅澤桂子)

サロン・ド・小田原

< 講演「シッキム（北インド）の山と植物」 > 7. 5

講演者 木場英久学芸員

出席者の何人がシッキムという地を知っていたであろうか。世界第三位の高峰カンチェンジュンガのある魅力的な地を、自然史の達人の口を通して居ながらにして探訪することが出来る。これはサロンの醍醐味である。

演題「シッキムの山と植物」の紹介は、紅茶の代名詞であるインド西ベンガル州産「ダーズリン」とはひと味違う「シルクの香、夢幻にひかるシッキム紅茶」の生産が今や近代化された処理工場でなされていること、もう一つの重要な産業に台所の名士カルダモン (Cardamon), Elettaria cardamomum (ショウガ科) があることの2点をもって、講演開始後約1分で終了した。残りの59分は余談だそうである。

6年前の内蒙古の話の時と同じ手法と自らが言われる木場さん一流の演題へのプロローグである。話は周到に準備された路線に乗ってよどみなく進む。

たった二人の調査隊員紹介は映画“Seven Years In Tibet”に重ねたパロディ“Twenty Seven Days In Sikkim”によって、インドに対するロマンは梶原一騎の劇画ネール元首相が嫁ぐ娘に宛てた手紙「愛と誠」の一節から、そして植物学者としての演者のこの地へのあこがれをHooker (1855) のHimalayan Journal (ヒマラヤ紀行) にある圏谷にたたずむLachoong村のスケッチと説明文の一節「・・・Lachoong, which by far the most picturesque village in the temperate region of Sikkim. (Lanchoongはシッキムの温帯域でもっともすばらしい最後の秘境である・・・)」を通して語り、聴衆をロマンの地に導く。

王国シッキムがインド22州となった経緯とその背景としての地理・地勢・歴史などが要領よく、また、笑いを誘う洒脱さと現地の人情の機微に触れつつ、しっかりとした自然

に対する視点も語られる。

森林局による道端の標語“YOU HAVE NOT INHERITED THE LAND FROM THE PAST BUT BORROWED IT FROM THE FUTURE (大地は過去から譲り受けたものではない 未来からの預かりものである)”を、ドライバー向けの標語“Don't sleep. Your family will weep.”や“Whisky is too risky to drive.”に見る洒落のおもしろさとともに紹介し、自然の保護を訴える。

專業シッキムの植物については、日本との共通種を多く含む暖温帯植物から、高地への特異な適応が生んだ植物の知恵、地上部分がセーターを着たように長い毛で覆われたセーター植物(ワタゲトウヒレン)や葉の一部が透明化した花序を覆うようになった温室植物(セイタカダイオウ)などの不思議が手短かく語られた。

最後に、数度のネパール調査との比較を通してネパールとは似て非なる新しさを発見する「比較こそ」の文化論的手法が語られ、この予備調査から発展して今現地におられる勝山さんへの期待をもって話は括られた。

今回のサロン出席者は30名、運営に対し

色々取りざたされる中、館側の新しい担当者田口さんのアイデアで、インターネットで配信出来る人たちへの案内がなされた結果である。(サロン担当:

蛭子貞二)

カット 水を運ぶ Lepcha 族の女性 Hooker(1855)ヒマラヤ紀行より



夏休み昆虫探検隊

「昆虫探検隊」に行つて

小学5年 山口 真央

7月25日から26日にかけて昆虫探検隊にさんかしました。バスで塩尻へ向かうと中のサービスエリアで、なんとミヤマクワガタとアカアシクワガタがいました。次の休けいではゴマダラカミキリがいました。こんなところでも虫をつかまえられるなんて、おどろきました。昼ごはんを食べた公園では、アカアシクワガタがとれました。それからベニシジミとノシメトンボをとったり、ハナムグリをとってもらったりしました。クヌギ林に行く途中では、エゾゼミがひっくりかえっていました。つづいてみると生きていたのでつかまえました。道ばたの木にはシャチホコガの幼虫がいました。しっぽの形が気に入ったのでいつつかまえて育ててみたいと思いました。田んぼにはミズカマキリやタイコウチもいました。

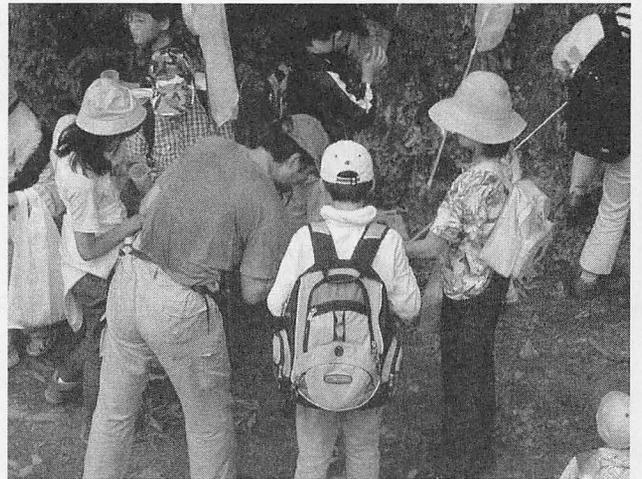
そのあとクヌギ林にバナナトラップをしかけたけれど、ぼくのはとれませんでした。先生が「かれた木にカミキリがくる」と教えてくれました。それで次の日、その木にねらいをつけて見ていたら、ルリボシカミキリを二匹もつかまえられたので、うれしかったです。

夜は雨がふっていて気温が低いので、外には行かず、旅館の中でいろいろな事を教えてもらいました。ライトトラップでは、ぼくは「たくさんガがきているな」と思ったけれど、いつもよりは集まらなかったそうです。

次の日の高原はキリだったので、チョウは少なかったけれど、おじさんにコツを教えてもらって、はじめてチョウを二匹つかまえることができました。とてもうれしかったです。

虫の事をよく知っていて、虫をつかまえるのがうまい子がたくさんいて「すごいな」とおもいました。虫の事をたくさん教えても

らったり、つかまえられたので、とてもよかったです。来年も参加したいです。



気温が低くて虫が入ってないねえー

初めて昆虫探検隊に参加しました。親子とも昆虫採集は初心者で、他の方とは持っている道具からして違うので、初めはどうなることかと心配しました。しかし、次々と見つかってゆく虫の話を、先生方や皆様からお聞きするうちに、私も昆虫の世界へ引きずり込まれて行き、久しぶりにわくわくして楽しい思いをさせていただきました。

何をおいても一番驚いたのは、子供たちの「とにかく虫をみつきたい」という執念の強さと、振る網の的確さです。そんな子供たちを見守り、育ててゆこうとしていらっしゃる先生方を始め、皆様の暖かさに触れ、「本当にこの催しに参加してよかった」と感謝しています。子供もすっかり昆虫採集の魅力にとりつかれたようで、来年は博物館の「昆虫採集入門」に絶対参加するのだと張り切っています。

来年皆様と再会できるのを楽しみにしております。(山口 ふづき)



チャンス！「今まさに羽化中のエゾゼミ」

写真撮影：参加者 下田准一さん

友の会 行事予定

あなたも参加してみませんか？

行事への参加申込み方法

はがき（あるいは往復はがき）に企画名、会員番号、参加者全員の氏名、性別、年齢、住所、電話番号を明記の上、〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館 友の会事務局へ

TEL：0465-21-1515 FAX：0465-23-8846

Eメール：tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp

<サロン・ド・小田原>

日時：8月31日(日)16:00～17:00 講演

演題：「神奈川の野鳥と移入種」

演者：加藤ゆき学芸員

場所：博物館1階講義室

茶話会：17:00～18:00（参加費500円）

申込み：8/24までに、ハガキ・FAX・Eメールで

茶話会への出欠も必ず明記の上、事務局へ（講演会のみ参加者は連絡不要です）

<夏休みオープンラボ>

日時：8/17(日)、8/24(日)

当日参加できる「クイズラリー」と「小さな探検隊」を行います。ご家族でどうぞ。

<オープンラボ 企画会議・勉強会>

9月13日(土)10:00～15:00 実習実験室

10月11日(土)10:00～15:00 実習実験室

<第13回植物観察会>

「ブナ、アカガシ等の巨樹を訪ねて」

日時：10月15日(水) 予備日17日(金)

集合：JR熱海駅 改札口(海側) 9:30

行き先：函南原生林 同行：勝山学芸員

持ち物：弁当・水筒・ループ・図鑑等

ハイキング装備で

バス代：約1,700円

申込み：9/30必着 普通はがきで事務局へ

初参加者はその旨記入・電話番号も記入
問合せ：佐々木

*当日の実施の有無については、
参加経験者は双方向連絡網にて確認

<第2期鉱物通信講座>

「地殻を構成する主要元素の挙動」募集

講師：国立科学博物館名誉研究員

加藤 昭先生

期間：9月～12月 詳しくは別紙で。

—広報委員の近況—

奥野花代子 / いただいたオキナグサやシユランを鉢から庭へ。どうやら根付いて一安心。
八木 逸 / ぼちぼち、制作とは別の雑用もいそがしくなります。

横溝吉香 / 犬の亡き跡、ベゴニアを植えた。満開

<夏休み自由研究「岩石標本を作ろう」>

日程：8/23(土)、8/24(日) 半日コース

午前は10:00～ 午後は13:00～

申込み：8/15までに普通はがきで事務局へ
博物館講義室にて、岩石標本を完成させます。
詳しくは別紙で。

<自然倶楽部>

博物館周辺の水辺の観察会

“水餓鬼を育てよう！”

川の生き物や植物を観察しながら「水餓鬼」を応援します。

日時：8月23日(土) 9:30～15:30

場所：博物館横の早川水辺

(博物館正面玄関付近集合)

会費：1,000円(保険・資料・食材料・・・)

申込み：8/15までに往復はがきで事務局へ

※詳しくは前回(6月)の同封チラシで。
問合せ：
佐藤の携帯へ



◆次回の友の会通信は、10月4日発送予定。